

私の海外生活

評議員 保利 耕輔

卷之三



私は一九八五年に大学を卒業し直ちに日本精工(株)に入社し営業部に配属され八年たつたところで輸出部門に異動となつた。当時会社は輸出に力を入れはじめた頃だった。米国では「バー社」と提携し業務を開始した。欧洲ではデュセルドルフに店舗を出しそこを拠点にしてフランス、英國に展開していくた。

「安からう、悪からう。」と云われていた時代で販売には苦労していたが次第に品質の良さが理解されはじめ少しつつ販売が伸びていった。独・仏・英に設けた会社は歐州市場を三分割してそれぞれ担当し販売を伸ばして行つた。

日本から持ち込んだペアーリング製造の機械はフルオートメーションで日本では人の工員が十台の機械を担当していた。ところが英國の労働組合は三台までしか持てない規約になつていて十台を担当することはできないことを主張していた。それでは人件費がかさみ採算が合わない。そこで工員や職長などを日本につれて来て作業現場を見せ或いは実習をさせて納得させることが出来た。

私はフランスの現地法人フランセヌクの二代目社長としての任命で一般の社員は赴任当初スイス国境附近のブサンソンの学校に少なくとも三ヶ月フランス語だけにどっぷりつかって勉強しなければならない。ところが社長は学校に行っている余裕はなく直ちに業務開始であった。従つて私はフランス語がいまもつて全く駄目で折角フランスに五年滞在したのに惜しいことをしたと思つてゐる。

然し幸い会社の中では日本との通信のこともあり英語が使われていた。

パンはパン屋へ行く。店のおばさんに「ボンジユール、マダム。」と云つて細長いパンを指さして「アン、バゲット、シルブアレ。」と云つて取つてもらう。おばさんは、「ボアラ、コヌ、バゲット、ムッシュー。」とコヌに力を入れて渡してくれる。こうして少しづつ覚えていった。



A black and white portrait of Dr. Li Yiqian, a woman with short dark hair, wearing a light-colored blazer over a dark top.

理事長接洽

理事長  
本庄 照子

本庄国際奨学財団の奨学生の皆さん、OB・OGの皆さん、こんにちは。世界各地にいらっしゃる皆さんが、それぞれの風土でどのようにご活躍されているのか、いつも思いめぐらせてています。

公益財団法人本庄国際奨学財団は1996年12月25日に設立され、1997年より第1期生を採用しました。2015年の今年は19期生を迎えるました。世界各地に平和と発展を願い、将来その国のリーダーとなりうる学生に対して支援をする姿勢は、設立当初から変わりません。研究分野や国籍を問わず誰でも奨学生に応募できる体制を取っています。2015年までに奨学生となつた外国人留学生と日本人の学生は71か国、467名になりました。

本庄国際奨学財団では奨学金支給のみならず、様々な活動を行っております。東日本大震災の被災者

への訪問活動は3年目に入りました。京都や静岡での研修旅行、OB・OGを講師に招いておこなう講演会「HISFワークショップ」はこれまで8回開催いたしましたが、様々な分野の研究をわかりやすく、楽しくお話ししていただき、参加者に好評を博しています。昨年は上海で同窓会を開催し、1期生から15期生まで15名が、年代、民族、研究分野を越えて、本庄ファミリーの一員として一堂に会し、楽しい時間を共有いたしました。今年度も様々な活動を行ってまいりますので、ぜひ積極的に参加してください。

今後も一人でも多くの意欲に燃えた若い人たちに支援を続け、国際平和のために力を尽くしてまいりたいと考えております。また、皆さんが志を高く持ち、母国と日本の懸け橋となりますよう、これからも応援を続けてまいります。

目次

- 01 理事長挨拶

02 特別寄稿 —— 評議員 保利 耕輔 私の海外生活

03 OB・OG寄稿① —— 趙 真九  
国交正常化50周年の日韓関係:「一衣帶水の隣国」か「近くで遠い国」か

04 OB・OG寄稿② —— 王 婷  
高倉健氏が中国で人気の理由

05 SENPAI! インタビュー VOL.3 ① —— ステファンヌ・ハルヨ・アスト・チョンドロ  
SENPAI! インタビュー VOL.3 ② —— 下口 ニナ

06 OB・OG訪問記  
①沈 衛東 ②チョン・カーウィー ③チャン・ハグエン

08 留学生寄稿 —— 五十嵐 敬幸  
ある日本人大学院裏留学生の1年とこれから

09 ハワイからの手紙 —— 押山 祥子  
ハワイ大学留学を終えて

10 ニューヨークからの手紙 —— 鈴木 大裕  
エリートが知らないアメリカの「公」教育

11 トビックス

12 2015～2016年度奨学生・研究助成金の公募案内  
財団の概要 / 謝辞

13 1年間の活動

15 10年間の軌跡 / <http://www.su.ac.jp/10years/>

## Contents

- 17 Words from the President
  - 18 Special Contribution — Kosuke Hori, *Councilor My Time Abroad*
  - 19 HISF Alumni in Action ① — CHO Jingoo  
Fifty Years of Diplomatic Normalization between Japan and Korea:  
Neighbors Just Across the Water or All-Too-Distant Neighbors?
  - 20 HISF Alumni in Action ② — Wang Ting  
Why Ken Takakura remains famous in China
  - 21 SENPAI! Interview VOL.2 ① — Stefanus Harjo
  - 22 SENPAI! Interview VOL.2 ② — Niina Nocon-Shimoguchi
  - 23 QB Interview ①Shen Wei Dong ②Tran Ha-Nouyen ③CHEONG Kar-Hooi
  - 24 Scholars in Action — Hiroyuki Igarashi  
My one year experience in HISF
  - 25 A Letter from Hawaii — Sachiko Oshiyama  
University of Hawaii at Manoa Report
  - 26 A Letter from New York — Daiyu Suzuki  
The American "Public" Education that Elites Don't Know
  - 27 Topics
  - 28 Guideline for Scholarship and Research Fellowship  
in 2015-2016 / About Us / Acknowledgements
  - 29 Timeline 2014-2015

# 国交正常化50周年の日韓関係：「一衣帯水の隣国」か「近くで遠い国」か

趙 真九 (1998~2000 業務実習生／韓国)  
Cho Jingoo, Ph.D.

韓国国立江原大学校日本学科講師



本庄家族の皆さん、こんにちは。

私は、韓国の大学で国際政治や日韓関係、日本政治外交などについて教えていた趙真九です。今日は私の専門でもある日韓関係について皆さんと一緒に考えてみようと思います。

皆さん、韓国第2の都市である釜山(ブサン)へ行ったことがありますか。この美しい港町では毎年10月末に「釜山花火祭り」が行われます。広安里(クァンアンリ)海水浴場や広安(クァンアン)大橋一帯で繰り広げられる花火祭りを見ようと百万人以上の人波が集まるそうです。少しでもいいところで観るために場所取り争いも激しいのですが、日本でも観られるところがあります。どこかご存知ですか。答えは対馬です。対馬は釜山からわずか50キロ離れているだけです。韓国と日本が「一衣帯水」の隣国といわれるゆえんです。両国は地理的に最も近いだけでなく歴史文化的に世界のどの国よりも深く関わっていました。

16世紀末、日本を統一した豊臣秀吉が朝鮮(当時)を侵略したのを韓国では「壬辰倭乱」(日本では「文禄・慶長の役」という)といいます。これは、「日本による植民地支配」とともに、日本といえば韓国人が最初に思い浮かべる不幸な事件です。当時対馬領主の宗義智や彼の義父である小西行長などの戦争回避のための努力がなかったわけではありませんでしたが、功を奏さず、結局、秀吉の朝鮮侵略は前哨基地であった対馬からの釜山上陸で始まりました。

しかし、この戦争が終わると、二百年間にわたる江戸時代の善隣友好関係が始まります。その象徴的なものが朝鮮国王が日本に派遣した外交使節であった「朝鮮通信使」です。朝鮮通信使は釜山から対馬を経て江戸まで往復しました。両国の文化の違いから大小様々な事件もありましたが、通信使の寄港地や宿舎では、両国の学者、画家、医者などによる文化交流が盛んに行われました。

こうした善隣関係を背景に両国の経済交流も深まっていきました。特に、唐辛子とさつまいもが対馬から伝えられたことは朝鮮の人々に多くの恵みをもたらしました。唐辛子は韓国を代表するヘルシーな食べ物として世界的に人気を集めているキムチを作るのに欠かせません。しかし、その唐辛子が17世紀に日本から伝えたといいうのは、意外に知られていません。さつまいもは、18世紀半ば通信使として日本に派遣された学者が栽培法を学び、種芋を持ち帰ったのをきっかけに広く普及しました。飢饉のとき、さつまいもは朝鮮の人々の命を救いました。対馬ではさつまいもを「孝行芋(コウコウイモ)」とよんでいるそうですが、さつまいものことを韓国では「コグマ」とよんでいるので発音が非常に似ていることに驚かざるをえません。

さて、日韓関係が悪いとき「近くで遠い国」という言葉をよく使います。今年は、日韓両国が14年に及んだ波乱に満ちた交渉に終止符をうち、国交を樹立して50年になる年です。しかし現状はその正反対です。2012年12月と2013年2月、日本と韓国に、それぞれ新しい政府が登場したにもかかわらず、いまだに両国の首脳間の会談が

# 高倉健氏が中国で人気の理由

王 婷 (1998~2000 業務実習生／中国)  
Wang Ting, Ph.D.

日綜(上海)投資コンサルティング有限公司総経理



開かれておりません。また、相手国に対する両国の国民のイメージも悪く、両国関係の展望についても非常に暗いです。

韓国の東アジア研究院(EAI)と日本の言論NPOが2014年5月と6月に両国で行った共同世論調査によれば、韓国国民の70.9%と日本国民の54.4%が相手国に対してマイナスの印象を持っていることが明らかになりました。両国の国民にマイナスのイメージを抱かせている要因として、程度の差はあるにせよ、両国の国民は、ともに、「歴史問題、領土問題、政治家の言動」をあげていました。また、日本国民の73.8%と韓国国民の77.8%が現在の日韓関係はよくないとみていただけでなく、日本国民の約56%と韓国国民の約78%がさらに日韓関係が悪くなる可能性があるとみました。

ひとつ面白いことは、両国の国民ともに60%以上が両国のメディアが国民感情に大きな影響を及ぼしていると答えたということです。これは、相手国を知るための情報源の多くを自國のメディアに依存しているということを意味します。日本のメディアをご覧ください。韓国のドラマが放映され韓国のアイドル歌手が毎日のようにテレビに出ていますが、その一方では、韓国でおきた事件や事故、韓国政府関係者や政治家の日本批判など「暗い話題」が「ニュース」として報じられています。両国関係の改善に役立つような「明るい話題」は「ニュース」にはなりません。

こうした事情を鑑みれば、現在の冷却した日韓関係を緩和するためには、歴史認識や領土問題、慰安婦問題など政治的に敏感で解決し難い問題を経済や社会文化などと分離して対応し、同時に、多様なレベルの対話と交流を重ねることによって悪くなったり両国の国民感情を取り戻さなければなりません。そのためには、両国の政治家やメディアが相手国の国民感情を刺激したり、事実でないものや一部を切り取って事実であるかのように誇張するような言動や報道を慎むことが何より重要です。

50年前、難産ではありましたがあ、日韓両国は国交を樹立しました。完璧なものではありませんでしたが、それをもとにこれまでの50年間、両国関係は飛躍的に発展してきました。国内状況や国際環境の変化などからすれば、両国は、いま、かつて経験したことのない大きな試練に直面しています。両国はこれから50年を見据えた「新しい時代」を切り開いていかなければなりませんが、それは「国家」や「国民」の「城」を超えたものでなければなりません。

日韓関係を見ると、対馬と釜山の間の海が静かで平和な海であった時期のほうがはるかに長かったように思われます。また今は東京で朝を食べてお昼にソウルへ行って仕事をした後、東京に戻って親しい友達と居酒屋でいっぱいすることもできる時代です。年間500万人の両国国民が両国を往来しています。「一衣帶水の隣国」である韓国と日本が、地理的にだけではなく、心と心が通い合う、眞の意味での「近くで近い国」になることを切に願い、また、そのために少しでも役立つようなことをていきたいと思います。

昨年11月18日、高倉健氏が亡くなられたことが中国でも速報で報道されました。中国の各種メディアでは多くの人々が様々な形で故人を追悼しました。外交部司馬クスマンも、当日の記者会見で高倉健氏が亡くなられたことに触れ、「高倉健先生は中国人民の誰もがよく知る日本の芸術家であり、中日の文化交流の促進に重要な貢献しました。我々は哀悼の意を表す」と発言しました。中国の中央テレビ局(CCTV)では、その日急遽番組を変更し、約30分の特集を組んで、高倉健氏の生い立ちを紹介した番組を放送し、彼の生前を偲びました。外国の俳優でこれほどまでに愛されていましたことにおいて、高倉健氏は例外的な存在と言えるでしょう。

中国で放送された彼の出演作品は、「君よ憤怒の河を涉れ」や「幸福の黄色いハンカチ」などありますが、それほど多いとはいません。それでも、彼は中国で偉大な俳優として尊敬され続けてきました。なぜ中国人は高倉健氏に対して特別な感情を抱いているのでしょうか。

まずは、高倉健氏は中国人がそれまで抱いてきた男性に対する美意識を変えたことです。80~90年代、多くの女性が「結婚するなら高倉健のようなクールな男をしたい」というほどでした。彼が主演した「君よ憤怒の河を涉れ」が中国で放映されたのは1978年で、改革開放後初めて放映された外国の作品だったそうです。1966年から1976年にかけての文化大革命の間、映画の主人公はバーバー化されており、服装と言えば紺と灰色の人民服のみ、人々の娛樂はとても貧しいものでした。そこには映し出されたクールで、無口で忍耐強く、正義感があり、びしっとしたスーツを着た主人公は、当時の中国人にとってなんと新鮮で、魅力的だったことでしょう。男女問わず高倉健氏があこがれの的となっていました。当時、映画で高倉健氏がきていた「トレントコート」が中国で生産されたが、半月もたたないうちに10万着が売られたそうです。



1976年日本で公開された映画「君よ、憤怒の河を涉れ」のポスター

次に、高倉健氏の映画は、中国人に日本を理解し、現代社会を理解する門を開けてくれたことです。1949年に新中国が成立して以来、中国は長い間鎖国と言える状態が続いていました。

「君よ憤怒の河を涉れ」では、陽気な街の雰囲気、端爽とした主人公など、これまで我々が受けている資本主義に関する教育とは正反対の様子が映し出されていたのです。この映画は中国人の人々に強い好奇心を芽生えさせ、日本を理解しよう、実際の世界を見ようとする気にさせる「きっかけ」となったと思います。80年代には、山口百恵が主演した「赤い」シリーズや「おしゃん」などの日本の映画、ドラマが中国のテレビでも放送され、日本ブームとなりました。山口百恵、三浦友和、栗原小卷、田中裕子、中野良子が中国では非常に有名でした。これらのドラマを通じ、中国人は日本を理解するようになったのです。

最後に、高倉健氏が活躍された80年代は、ちょうど中国社会が特別な時代でもあります。1980年代から改革開放政策が開始され、人々が文化大革命の束縛から解放され、自由を謳歌し、勢いよく近代社会を作ろうとして意気揚々として希望に燃えた時代でした。日中関係においても、80年代は日中友好ハネムーン時代でした。日本のドラマ、映画などの文化的なものだけではなく、テレビや洗濯機、冷蔵庫などの日本の製品が少しずつ一般家庭にも入り始め、「日本」は中国人にとってまさに「あこがれ」の存在でした。高倉健氏はそんな時代のシンボルと言えます。

私もその時代に青春時代を送った一人です。高校の時に、「赤い」シリーズが中国を席巻しました。山口百恵さんが大好きで、大学進学の時に、英文科と日本語専攻のどっちかを選ばなければならぬときにも、迷いもせずに日本語専攻を希望しました。現代の国際関係を語る上でソフトパワーの重要性も無視できないものになります。高倉健氏は日本のソフトパワーの代表的な存在だったと思います。日中関係の改善のためには、こうした文化の力、民間の力を信じることも必要だと思います。



同じ映画が中国では1978年に「追捕」のタイトルで公開された。



ハルヨ・ステファンス (1997-2000 異学生/インドネシア)  
Stefanus Harjo, Ph.D.

国立研究開発法人日本原子力研究開発機構(JAEA)研究主幹

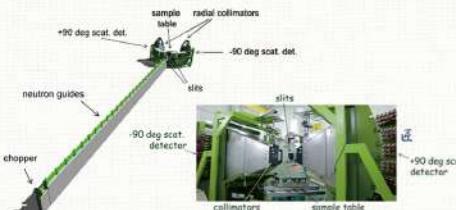
わたしの誕生日に撮った写真です。自宅で家族揃ってシンプルな料理で祝うのが我が家のお習慣です。

## 日本原子力研究開発機構(JAEA)とは?

「JAEAは原子力に関する研究しか行っていないというイメージはありますが、私はどちらかというと現在材料工学に関する研究を行っています。JAEAの東海村には、JAEAと高エネルギー加速器研究機構(KEK)が共同で開発・運営しているJ-PARC(Japan Proton Accelerator Research Complex)という施設があり、私はJAEA職員として働いています。J-PARCは、素粒子物理、原子核物理、物質科学、生命科学、原子力など幅広い分野の最先端研究を行うための陽子加速器群と実験施設群の呼称です。世界に開かれた多目的利用施設であるJ-PARCの最大の特徴は、世界最高クラスの陽子(1MW)ビームで生成する中性子、ミュオン、K中間子、ニュートリノなどの多彩な2次粒子ビーム利用にあります。

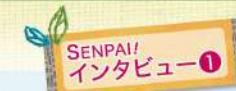
## 開発した中性子実験装置に「匠」と命名

物質科学、生命科学を行うための物質・生命科学実験施設(MLF: Materials & Life Science Experimental Facility)にて、金属材料を中心とした工学材料研究を行うための中性子実験(回折)装置を設計・建設し、運営するとともに装置高度化から自分が興味のある鉄鋼材料に関する研究を行っています。具体的には、透過能力の高い中性子を活かして強度に関わるエンジニア部品内部の応力を調べる研究、先端材料の様々な条件下での変形又は機能発現機構の解明や製造過程での金属組織変化と機械特性との関係を明らかにする研究等を行っています。硬いことを述べましたが、簡単に言いますと中性子を使って好きな材料の研究を現在楽しく行っています。私が開発した装置に「匠」という愛称をつけました。これは、中性子を用いた工学材料の分野で自分たちが「優秀だ」という意味ではありません。われわれは「匠」となって、さまざまな工学材料の研究をするための優れた装置を実現し、それを用いた優れた研究を生み出すことを目指したいのです。おかげさまで、匠はMLFでは人気装置の一つであり国内外の学術研究機関や企業の多くの研究者が利用を希望しており、その倍率は2倍程度になっています。



匠 (J-PARC/MLFにある工学材料用中性子回折装置) の模式図及び写真です。

試料テーブルには1トン程度の大きいものを載せて、その中の10mm程度の小さい領域を測定対象にしています。



下口 ニナ (2005-2007 異学生/フィリピン)  
Nina Nacon-Shimoguchi, Ph.D.

東京農業大学非常勤講師



## 経営学から農業経営学へ

1998年に特別留学生として来日し、東京農業大学生物企業情報学科(現在の国際バイオビジネス学科)に入学しました。フィリピンにいた時には、経営学、特にホテル・レストラン経営に強い関心がありました。家族がそういったビジネスを手広く行っていたためです。そして日本に留学して日本企業の経営戦略、特にその成功の秘訣を勉強することになりました。

ところが東京農業大学でたくさんの貴重な経験をし、農業に興味を持つようになりました。東南アジアだけではなく世界各国からの留学生に食文化、社会経済、農業の違いや相似について教わりました。そして自分が自国のことについて無知であることを自覚したのです。9年間私の指導教授であった藤本彰三教授のおかげで、日本各地の美しい土地を巡り、日本文化や農業に触れる機会をいただきました。また、北海道の網走で農家滞在もさせていただきました。農大が企画し多くの国的学生が参加した国際学生サミットに参加して、食糧、農業、環境について討論する機会もいただきました。このサミットでは、環境に優しい農法、安全で安定した食糧供給の方法、遺伝子組換作物の安全性の分析、そして学生としてこれらの問題にどのように取り組むかについて話し合いました。

こうして、私は有機農業に关心を深めました。1999年に学科が企画したフィリピンバイオビジネス実地研修にて有機農家へ行ったことが決め手となりました。卒業論文では、フィリピン、カビテ州における有機レタスファームの農業経営を取り上げました。修士課程ではマニラ首都圏における有機野菜の市場、ホテル・レストラン、消費者を研究しました。博士課程では、マニラ首都圏における有機米と有機野菜の需要、一方で主な生産地域におけるそれらの生産と市場、両者の現状と問題点を明確にすることによって産業全体の把握を試みました。

## フィリピンと日本の有機農業研究

これまで10年以上にわたって有機農業を研究する中で、一研究者として、また母親として様々な場面に遭遇しました。私の研究への意欲の源泉は零細野菜農家を知ったことです。これら農家は、商社に推されてリスクを承認で有機農業を始めました。しかしやがて自分たちには技術も適切な訓練も不足しており、それを改善するためのサポートシステム

もないことに気が付いたのです。このビジネスに従事する農家への教育などのサポートの重要性を目の当たりにしました。

2013年に「人・地域づくりに貢献する主体形成・価値創造型の農業・農村支援モデル」という4年間の学術振興会の研究プロジェクトに参画することになりました。この研究プロジェクトは社会経済の発展と地域特性の観点から、農業や地域開発に関わる公・共・私的支援の役割を明らかにすることを目的としています。農業知識情報システム(AKIS)、実践コミュニティ(CoP)、正統的周辺参加(LLP)の概念的枠組みのもと、フィリピンと日本の有機農業に関するケーススタディを行うことが私の仕事です。日本では埼玉県、フィリピンではネグロス島とルソン群島の各地で研究を行っています。さらに今年には鹿児島県を加える予定です。最終的には各地域を比較し、様々な階層において有機農業がさらに発展するように、キーポイントと成功の秘訣を探っていきたいと思います。

## “アバンテ” — 前へ踏み出そう

私は偶然目の前に現れたチャンスは逃さず挑戦することにしています。そして出会ったすべての人々に感謝をしています。いい仕事を出会ったら、とりあえず一步踏み出します。「アバンテ」は大好きなフィリピン語で、「前へ踏み出そう」という意味です。そしてどんな状況でも笑顔を忘れず、いつも前向きな思考を心がけています。

本庄国際奨学財団の家族に入れていただいたことにいつも感謝しています。400名以上の様々な分野のプロフェッショナルによる国際的なグループの一員でいられることは、非常にありがたいことです。財団設立20周年の記念行事には同窓生が一丸となって協力し、この素晴らしいネットワークをより強固で有益なものに育て上げたいと思います。



HISFのフィリピン人異学生、Lowelaさん(右端)とMarkさん(左端)と2015年3月の本庄財団のイベントにて(子供達と共に)



**沈 衛東**  
(1997-2000 奨学生／中国)  
Shen Wei Dong, Ph.D.  
株式会社コクレア

### 人工内耳のトップカンパニー

日本コクレア社はオーストラリアに本社があり、人工内耳など耳鼻咽喉科関連の製品を開発・販売する会社です。日本でも全世界でもマーケティングシェアナンバーワンの会社です。人工内耳の歴史が短いが、最先端の医療技術、画期的な治療方法で、世界中約20万人以上の聴覚障害者が人工内耳の恩恵を受けっています。マルチチャンネル人工内耳の研究開発者クラーク教授は次期ノーベル賞の候補者とも言われています。

私は日本コクレア社のクリニカルサービス課に所属しています。スタッフ30名ぐらいの小さい会社なので、臨床研究や社内、社外の人工内耳に関するトレーニング、学会イベントや各種のサポートなどほぼ仕事全般やっています。出張も

多いが、手術見学の機会もあります。いろいろな人と接觸し、各病院の先生から耳科手術の方法を習うことができ、今後の仕事に有効活用することができます。

### 中国人奨学生同窓会を活発に

新年度は今の仕事をしっかりやりながら、財団の中国人奨学生の間の連絡や情報交換、近況報告などのことをお手伝いしようと思っています。留学生は勉強、研究ばかりではなく、異国との文化を理解することも大事だと思います。



**チャン・ハグエン**  
(2004-2006 奨学生／ベトナム)  
Tran Ha-Nguyen, Ph.D.  
独立行政法人情報通信研究機構  
ワイヤレスネットワーク研究所  
スマートワイヤレス研究室

### 無線通信の研究

周波数の有効利用と高性能かつユーザが満足できる無線通信システムを目的としたホワイトスペース無線システム・プロードバンドワイヤレスアクセスシステムに関する研究をやっています。特に、ユーザに利用可能な周波数と送信電力等を提供するため、地理状況に依存する伝搬特性と場所・時間に依存する周波数の利用状況を考慮した無線通信用ホワイトスペースデータベースシステムの設計、実装、性能評価などをやっています。

昔、実験環境が出来るようになるというニュースを聞いたので、故郷でも実験をやりたいです。

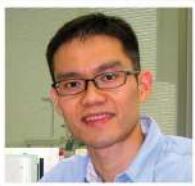
### 日本の文化を体験しよう

日本を選んだ留学生の皆さん、おめでとうございます。個人の経験ですが、日本では学問の知識が学べるだけではなく、日本という環境の中で生活すれば日本語は多少理解できるようになります。この機会を活かして日本語の学習、そして日本の伝統、文化、社会の各イベントに対して興味をもって体験すると、それは他の場所では得られない貴重な経験だと思います。

また、多くの留学生にとって奨学生は一つの大きな課題だと思いますが、本庄国際奨学財団の奨学生に挑戦してみませんか。優しい財団の方々、優秀な先輩たち、よく交流のイベントが行われて、広いネットワークが出来ているのでとても素晴らしい所だと思います。

### ベトナムの故郷の町にもシステムを導入

研究開発したシステムは海外を含めて数ヶ所で性能評価を行いましたが、出来れば世界中で我々のシステムが使われるよう頑張っています。それに向けてシステムを改善し、さらに新たな場所で展開・評価する必要があります。最近、ベトナムの故郷の町で地上デジタル放送への切



**チョン・カー・ウイー**  
(2004-2007 奨学生／マレーシア)  
Cheong Kar-Hooi, Ph.D.  
独立行政法人産業技術総合研究所  
計測標準研究部門・流量計測科  
液体流量標準研究室

### 計測の番人

計測の国家標準（例えば、長さ、質量、時間など）の開発や維持管理を行う人たちと一緒に仕事をしています。自分には、「石油微小流量の国家標準の確立」というミッションが与えられています。この標準が実現したら、自動車の燃費評価の信頼性が高まります。

### 一人じゃない

勉強や研究に励んでいる皆さんは、きっとそれぞれの悩みを抱えています。研究課題の壁、進路の悩み、人間関係のトラブルなど、いろいろあるかと思います。こういうときは、日本に留学できること、さらに本庄国際奨学財団とご縁があったこと、そのありがたみを思い出すと、自然と肩から力が抜けて、状況の見方が良い方向に変わるものかもしれません。

### 過去5年間の目標を達成

2014年度中に、5年間やってきた仕事は、やっと目標を達成しました。失敗も多かっただけに、達成感がありました。現在は、頭をリフレッシュして、来年度から新しい課題に挑戦していくたいと思います。



**五十嵐 敬幸** (2014 奨学生／日本)  
Hiroyuki Igarashi  
東北大学大学院医学研究科博士課程

### ある日本人大学院奨学生の1年とこれから

現在の医療では治療が困難とされる疾患や障害に対する新しいアプローチでの治療に貢献できるような研究がしたい。私が中学生の時に志した目標になんとか沿う形で今に至っているのは、非常に幸運なことであろう。現在は東北大学医学系研究科の博士生として、多能性幹細胞を用いて再生医療への応用を目指した研究を行っている。電気工学から分子生物学、幹細胞医学へと専門が移るにつれて、分野を超えたバックグラウンドを持っているからこそ、今までないアプローチで新規の知見を得ることができると考えられるようになった。自分が先頭に立って何かを明らかにすることが非常に楽しいと感じており、それを生業とする研究者になるため、博士号取得を決めた。博士課程への進学に際して経済的支援を必要としていた私は、本庄国際奨学財団に受け入れてもらおうとお蔭でこれまで充実した研究室生活を送ることができている。一般的な奨学プログラムと異なり、そこでつくられた繋がりを“家族”と呼ぶ人たちを、私は他に知らない。2014年からその一員として迎え入れていただき、手厚いサポートをいただいた私の研究と本庄ファミリーの繋がりのように、このような友人の輪とそこで芽生えたアイデアが私の今後を豊かにしてくれるだろう。初対面の人達と交流する際、少しの勇気と積み重ねた経験がその後の展開を大きく押し広げてくれるよう思う。その点において、研究室に留まるだけでは決して得られない経験をするチャンスを提供してもらえる環境にいられることが非常に貴重なことだと認識している次第である。

たマウス筋芽細胞株との共培養によりヒトMuse細胞が筋細胞へと分化することを見出し、2014年7月にドイツで開催された学会において世界に先駆けて報告した。

### ドイツでの国際学会とこれから

本庄国際奨学財団には国際学会参加補助制度があり、その支援を受けて『5th International Congress on Stem Cells and Tissue Formation』に参加することができた。よく日本人はシャイで新しい環境に溶け込むのに時間がかかると耳にするが、国際学会で多くの友人を得ることができたのは、国際色豊かな本庄ファミリーでの経験が後押ししてくれたからのように思う。研究室から単独で参加していたのだが、夕暮れ時には新しく得た友人達とビール瓶を手に街を歩いていた。滔々と語り合いながら、書き表せない幸福感を感じていたのを覚えている。研究発表においては、多くの研究者と意見交換ができることはもちろん、著名な先生と1時間近く議論をさせていただいた。本庄ファミリーの繋がりのように、このような友人の輪とそこで芽生えたアイデアが私の今後を豊かにしてくれるだろう。初対面の人達と交流する際、少しの勇気と積み重ねた経験がその後の展開を大きく押し広げてくれるよう思う。その点において、研究室に留まるだけでは決して得られない経験をするチャンスを提供してもらえる環境にいられることが非常に貴重なことだと認識している次第である。

### 橋となる

同じ方法論を用いて研究対象を変えていく研究を“method-oriented”、未知の問題を常に見据え、それを解決するのに最適の材料や方法を選択するという研究を“problem-oriented”と呼ぶ。現在の研究分野は細分化され、専門化が加速している。もし後者の姿勢を貫くことができれば、それは大きな未知への橋となり、次世代に広がる技術革新の起点となるだろう。未解決の問題に取り組むためには、より多くの人と交流・議論し、自身の理解を広範なものにすることが重要である。本庄ファミリーの中で私が得た友人の専門分野は多岐にわたる。この繋がりから得られる知識を吸収し、未だ誰も垣間見たことのない真理を明らかにしたい。また、本庄国際奨学財団設立の趣意にある“友情で国々を繋ぐ橋となる人材”を目指し、研究に邁進していく次第である。





押山 祥子 (2014 UHプログラム奨学生／日本)  
Sachiko Oshiyama

早稲田大学会計研究科2年

## ハワイ大学留学を終えて

ハワイ大学マノア校のビジネススクールであるShidler College of Businessにおいて、2014年5月からの6週間、三澤満教授より国際金融論を学ばせて頂きました。

ハワイ大学マノア校は1907年創立の州立総合大学で、二万人の学生が学んでおり、世界各国から約1800人の留学生も集まる国際色豊かな大学です。ホノルルの東部に位置し、近くには観光地でもあるマノア渓谷があります。一般的なハワイの海のイメージとは異なり、キャンパスは山を臨み、大木が連なる、緑豊かな静かな環境です。降水量が多く、虹が多いことでも有名な場所で、雨上がりの虹が印象的な、美しいキャンパスでした。年間を通して温暖な気候の為、図書館は終日窓が開け放され、ハワイの心地よい風を感じ、鳥の声を聞きながら勉強できることは、ハワイのキャンパスならではの思い出です。そのような穏やかな雰囲気のキャンパスですが、ハワイ大学の学生は皆勤勉で感心させられました。講義に対する能動的な姿勢、講義中のディスカッションへの積極性など、日本人として見習いたい部分が多くありました。またMBAの夜間講義ということもあり、大半の学生が社会人としてフルタイムの仕事を持っており、時間的な制約がある中で熱心に勉学に励む姿にモチベーションの高さを感じました。

次に講義についてですが、上記のような勤勉な学生と共に、金融の第一線で長年ご活躍された三澤満教授から直接ご指導頂き、大変有意義なものとなりました。

三澤教授は、東京大学やハーバード大学ロースクールで学ばれた後、東京やニューヨークにおいて30年以上の国際金融のキャリアをお持ちの、大変著名な教授です。三澤教授の豊富な実務経験に裏付けられた講義内容により、今まで日本で



学んでいた机上の理論、具体的にはデリバティブ取引の一種であるオプションや裁定取引、企業の投資意思決定において重要な資本予算などの理解が非常に深りました。またそれらを国際的な共通語である英語で学べたことも、今後ますます国際化する社会における自身のキャリアにおいて有益なものとなると思います。三澤満教授には国際金融の知識のみではなく、社会で働く上で最も重要である人間性や利他の精神を教えて頂いたように思います。社会人としても人間としても未熟なこの時期に、一流の方とのご縁を頂き、このような見識を深める素晴らしい機会を頂いたことは、生涯の財産となると思っています。

学業以外の点ですが、ハワイはいわゆる多民族、多文化社会であり、様々なバックグラウンドを持つ人々が調和し共存しており、日本と異なるそのような環境に身を置き、様々な人々との出会いを通して、自分の視野が広がったように感じられます。異国の地で学ぶことは、様々な困難が生じることもありますが、困難は私たちを成長させてくれる機会となり、今後の確固たる自信となったと思います。

最後になりましたが、このような貴重な機会を頂き、素晴らしい時間を過ごさせて頂きました事を、この場を借りて深く感謝申し上げます。

奨学金をご支援して下さいました本庄国際奨学財団の皆様、ハワイ大学で有意義な授業と今後のエンカレッジメントを下さいました三澤満教授に心より御礼申し上げます。この留学で得たことを今後に生かし、少しでも社会に還元出来ますように、精進していきたいと思っております。どうもありがとうございました。

## ハワイからの手紙



鈴木 大裕 (2013 JAAプログラム奨学生／日本)  
Daiyu Suzuki

コロンビア大学ティーチャーズカレッジ博士課程

## ニューヨークからの手紙



## エリートが知らないアメリカの「公」教育

あなたは米国の教育にどのようなイメージを持っているだろうか。日本と違い、教員による一方的な講義ではなく、活発な議論が繰り広げられるインタークティヴな授業、生徒が教員に積極的に質問する自由な雰囲気、ただ暗記されるのではなく考えさせる授業…。戦後、「米国に追いつけ追い越せ」と頑張って社会再建の道を歩んで来た日本で、そのような好意的なイメージを米国の教育に抱いている人は少なくないと思う。だが、実際には、それは「米国の教育」の光の側面に過ぎず、闇の部分は日本ではほとんど知られていない。

私自身、その栄光の側面しか知らなかった。幼い頃から無意識に米国に憧れ、16歳の時に思い立って留学した。ニューハンプシャー州の小さな全寮制私立高校での、日本とは全く違う、考えさせる学びの質に衝撃を受けた。いつか日本の教育を改革したい、そう心に決めた。その後、コールゲート大学、スタンフォード大学大学院に進学して教育学を学んだ。そして、日本の現場を自分の目で確かめようと、帰国を決意した。

### 意識し始めた公教育

帰国後、通信教育で2年半かけて教員免許を取った。迷わず公立中学校で教えることを選び、その後6年半、英語教諭を勤めた。多様な家庭環境から幅広い能力の生徒たちが集まる環境で、「公教育」の難しさと意義、そして可能性を実感した。人を信じ、社会の中で自分らしく生きる術を生徒が見出す手伝いをすること、一生懸命生きることの喜びを伝えることが教員の役割だと想うようになった。

教員7年目、私は再留学に踏み切った。既に米国では、教員の能力給制度、教員雇用制度の市場化や、公設民営校などによる学校選択制など、柔軟性に欠ける日本の教育法制度では想像もつかない大改革が、市場理論の積極的な導入によって実践されていた。目標は、博士号を取得して米国教育改革のノウハウを日本に持ち帰ることだった。

### 再渡米して気付いた米国の凄まじい教育格差

「人間は生まれながらにしてみな平等である」というのは、言わずと知れた米国独立宣言の言葉だ。そんな自由と平等の国であるはずのアメリカの憲法が、教育を受ける権利を国民の基本的人権として保障していないという事実に驚く人は少くないと思う。実際、最低限の教育を受けられない子も多く、米国は国連が採択した子どもの権利条約にも批准できていない。国連加盟国193ヶ国中、未批准国はソマリア、

南スーダンと米国の3ヶ国だけだ。従来、米国では土地にかかる固定資産税が教育予算の主要な財源となっており、地価の格差によって露骨な教育予算の不平等が生じる。高級住宅街には有名私立校額負けの教育施設やスタッフを誇る公立校が存在するかと思えば、ニーズの高い貧困地区の学校が経験豊富な教員を雇えず、教科書も人数分揃えられず、チョークやトイレットペーパーさえまらない所もある。

激しい格差を生む公教育予算制度の正当性は連邦最高裁判でも問われてきたが、米国は最終的に、十分な教育を受ける権利を全ての国民に保障し、貧困する地区的子ども達に投資することではなく、市場原理の導入による貧困地域の教育改善という安易な実験を選んだ。公教育を市場化するため、人間の教育は数値化、標準化、そして商品化され、教育のあらゆる侧面において進められた民营化は、いつしか公教育を豊かなビジネスの土壤に変えてしまった。標準テストの点数が低い従来の公立学校が次々と閉鎖される代わりに、公設民営校などの選択肢が新設され、全ての学校が生存を懸けて点数の取れる生徒を奪い合う一大教育市場が生まれた。「学校選択制」の名の下に、公教育の序列化が正当化され、誰にでも開かれた公立学校の概念は過去のものとなつた。そして、皮肉にも、貧しい地域の子ども達はテスト対策だけの貧弱化した教育を施され、裕福な地域の子ども達はテストとは無縁のリベラルアーツ教育を受けるという、公教育の枠組みにおける二極化が進んだ。

### 私たちの責任

中学校教員時代に出会った私の恩師の言葉を思い出す。「学校は人を育てる場所だから。」でく当たり前であるはずの言葉が新鮮に聞こえてしまう所に、アメリカ公教育の危機を感じる。だがそれは日本の公教育にも言えることではないだろうか。全国学力テストが抽出式から全員参加へと戻され、学校別の成績開示が可能にされたことで、学校間や地域間の点数競争は激化した。同時に、塾への教員養成の委託、学力向上のための塾との連携等が促進されることで学校が「塾化」する反面、公設民営校の導入により、公立学校での「グローバルエリート」教育が実現しそうだ。米国同様、全人教育が一部の人間の特権となる日はすぐそこかもしれない。我々は何をもって「公」教育と言うのか、どんな人間を育てたいのか、何を次世代に託すのかが、今、問われている。そして、幸運にも優れた教育に恵まれた私たちの責任とは、いったい何なのだろうか。

## トピックス①

### ペルーの天文学に貢献する父子



イシッカ・ホセさん(1997~2000 横浜賞学生／ペルー)が2015年1月31日ABC朝日放送で放映された「世界の村で発見!こんなところに日本人」に登場されました。ホセさんは太陽物理学者であるお父様、石塚睦さんが太陽観測所を作るために日本から渡来したペルーで生まれ、東京大学大学院に留学して天文物理学で博士号を取得されましたが石塚睦さんはペルーの首都リマから350Km内陸のワンカイヨに太陽観測所「コスモス」を建設することに20年の苦労を重ねましたが、1988年に残酷なテロリスト

に観測所を破壊されてしまいました。番組ではこの30年前の事件をまるで先週起きたことのように唇をかみしめ涙を堪えて悔しさをにじませながら語る石塚睦さんの姿が涙を誘いました。しかし息子のホセさんの尽力もあって日本から天体望遠鏡などが送られ、ワンカイヨに天文台を建設。ペルーの天文学に大きな貢献をされました。「太陽観測所はなくなってしまったけれども、彼(ホセさん)を天文学のために生んだことが私のペルーでの60年だ。」睦さんの力強い言葉に、熱っぽい睦さんとはやや性格を異にした穏やかなホセさんの目がうるんでいるように見えました。ホセさんはワンカイヨの天体観測所所長として世界一太陽が美しく見えるペルーの地で働いています。



テロリストに破壊された太陽観測所「コスモス」

## トピックス②

### 故郷ウガンダの村を照らす

#### オツヤ・ダビド・オデケ (2011-2016 横浜賞学生／ウガンダ)

David Odeke Otuya

東北大学通信研究所

私はウガンダに生まれました。ウガンダの国旗は黒、黄、赤の三色に彩られています。黄色は、年中絶え間なく豊富な陽光が降り注ぐことを表しています。赤道直下の国ですから当然と言えば当然です。ほとんどの村や集落は、日中は太陽の光で明るく、そして夜には完全な闇が訪れます。私の故郷の村もそうです。夜間の照明には灯油ランプを使います。しかしこの灯油が問題……灯油の値段は高いので家計を圧迫し、さらに灯油ランプから出る煙は、体に有害で、時に目を悪くことがあります。



室内に設置された変換器



屋根の上のソーラーパネル

私は来日してから、どうしたらウガンダの私の村の夜間照明の問題を改善することができるだろうか、とずっと考えていました。経済力の限られたひとりの留学生ができる事、それは安くても効果が期待でき、持続可能でメンテナンスが簡単なもの……そしてひとつの提案に至りました。それはソーラーパネルです。ウガンダに豊富にあって電気製品を動かせるエネルギー資源、それは太陽光エネルギーじゃないか！横浜賞のおかげで少し余裕があったので、ソーラーパネルを買い、ウガンダに持っていました。

それから数年経ちますが、ソーラーパネルは順調に稼働し、村に住む両親に明かりと笑顔をもたらしています。将来は集落にもっとソーラーパネルを増やして、人々の笑顔をもっと増やしたいと、胸を膨らませています。

## 2015～2016年度奨学金・研究助成金の公募案内

### 奨学金プログラム

- 外国人留学生奨学金(第20期生)【対象】日本の大学院に在籍中または入学予定の外国人留学生
- 国内日本人大学院生奨学金(第11期生)【対象】日本の大学院に在籍中または入学予定の日本人学生
- 海外留学日本人大学院生(第20期生)【対象】海外の大学院に在籍中または入学予定の日本人学生

### 海外提携プログラム

- Jack Lewis Scholarship Program(南カリフォルニア大学)
- Professor Misawa Scholarship Program(ハワイ大学)
- JMSA Scholarship Program(米国日本人医師会)
- JAA Scholarship Program(ニューヨーク日系人協会)
- CUSSW Scholarship Program(コロンビア大学)

### 研究助成金プログラム

- 食と健康研究助成金【対象】健康維持に対する食品あるいは食品成分の効果を、人を対象とした試験あるいは代替試験法によって明らかにしようとする研究に対する助成。

※募集期間等募集に関する詳細は、ホームページで公表します。申請書類もホームページから取得できます。

※海外提携プログラムは、各提携先の大学または団体において募集・選考を行います。

詳細は当財団のホームページに掲載されている各大学または団体のホームページをご覧ください。

### facebookに参加しよう！



Honjo International Scholarship Foundationのグループアカウントで財団からのお知らせや、本庄スカラーカーからの研究・仕事に関する情報、国との情報、プライベートでの活動の情報・質問・募集・意見などを活発に発信・交換しています。ぜひリクエストを送ってください。

<https://www.facebook.com/groups/HISHonjo/>



### 名簿の作成にご協力ください！

ホームページで名簿を作成しています。  
連絡先お知らせフォームから情報をお送りください。  
名簿のページへ入るためのIDとパスワードは本庄スカラーカーのみにお知らせしています。財団事務局へお問い合わせください。

<https://hisf.or.jp/update/form.html>

### 財団の概要

【名 称】公益財団法人本庄国際奨学財団

【英文名稱】Honjo International Scholarship Foundation

【設 立】1996年12月26日

【理事長】本庄 照子

【目 的】

この法人は、学術研究への奨学援助および研究助成を行い、もって我が国と諸外国との教育・学術・文化における交流及び相互理解を促進するとともに、人材の育成及び教育・学術・文化の発展に寄与すること目的とする。

### 謝 辞

この機関誌の作成にあたり、英文翻訳・英文校正をしてくださったKris Reevesさん、David Odeke Otuyaさん、Syed Emdadulさんに感謝いたします。そしてすばらしい文章を寄せてくれたみなさまに心より感謝申し上げます。



1997年 11月4日

懇親会 伊藤園本社会議室

November 4, 1997  
The annual party  
at Itoen head office building



1998年 6月18日

研修旅行 伊藤園中央研究所

June 18, 1998  
Shizuoka trip  
at Itoen Central Research Institute



1999年 12月10日

忘年会 伊藤園本社会議室

December 10, 1999  
Year-End party  
at Itoen head office building



2000年 6月28日

懇親会 伊藤園本社会議室

June 28, 2000  
The annual party  
at Itoen head office building



2001年 3月30日

歓送迎会 小田急センチュリーハイアットホテル  
(現ハイアットリージンシー東京)

March 30, 2001,  
Welcome and farewell party  
at Odakyu Century Hyatt Hotel  
(Hyatt Regency Tokyo at present)



2002年 3月29日

歓送迎会 小田急センチュリーハイアットホテル  
(現ハイアットリージンシー東京)

March 29, 2002  
Welcome and farewell party  
at Odakyu Century Hyatt Hotel  
(Hyatt Regency Tokyo at present)

## 18年間の軌跡 Journey of 18 years



2003年 6月6日

研修旅行 伊藤園中央研究所

June 6, 2003  
Shizuoka trip  
at Itoen Central Research Institute



2004年 3月30日

歓送迎会 小田急センチュリーハイアットホテル  
(現ハイアットリージンシー東京)

March 30, 2004  
Welcome and farewell party  
at Odakyu Century Hyatt Hotel  
(Hyatt Regency Tokyo at present)



2005年 8月9日

野球観戦 神宮球場

August 9, 2005  
Watching a professional baseball game  
at Jingu Stadium



2006年 7月14日

野球合宿 筑波山登山

July 14, 2006  
Baseball training camp  
at Mt. Tsukuba



2007年 6月8日

研修旅行 伊藤園中央研究所

June 8, 2007  
Shizuoka trip  
at Itoen Central Research Institute



2008年 6月6日

研修旅行 伊藤園中央研究所

June 6, 2008  
Shizuoka trip  
at Itoen Central Research Institute



2009年 3月18日

歓送迎会 ハイアットリージンシー東京

March 18, 2009  
Welcome and farewell party  
at Hyatt Regency Tokyo



2010年 3月30日

歓送迎会 ハイアットリージンシー東京

March 30, 2010  
Welcome and farewell party  
at Hyatt Regency Tokyo



2011年 4月9日

卒業生を囲む会 ハイアットリージンシー東京

April 9, 2011  
Dinner party with graduates  
at Hyatt Regency Tokyo



2012年 7月18日

台湾留学生の会 居酒屋阿波おどり

July 18, 2012  
Dinner party with Taiwanese Alumni



2013年 9月5日

仙台同窓会 居酒屋みのむし

September 5, 2013  
Alumni reunion party at Sendai



2014年 3月16日

卒業生を囲む会 東京大江戸博物館

March 16, 2014  
Trip with graduates  
at Tokyo Oedo Museum

# 1年間の活動

2014年3月～2015年3月

## 1 歓送迎会および研究助成金授賞式

2014年 3月24日

ハイアットリージェンシー東京にて歓送迎会および研究助成金授賞式が開催されました。恒例の留学生によるパフォーマンスは、ラヒル ジャヤコディさん(スリランカ)とチーチャン ニエインさん(ミャンマー)の最初で最後の結成デュオが、キーボードとギターで陽気な演奏を行ってくれました。



## 2 博士論文発表会

2014年 5月25日

ハイアットリージェンシー東京にて、博士論文発表会が開催されました。



## 3 静岡研修旅行

2014年 6月20日～21日

伊藤園の中央研究所(静岡県牧之原市)、ホテイフーズコーポレーション富士川工場を見学しました。



## 4 第7回 HISFワークショップ

2014年 7月6日

ハイアットリージェンシー東京で、2期生花木伸行さん(エクスマルセイユ大学経済経営学部教授)による講演会「経済学再考－実験・行動経済学からのアプローチ」を開催しました。実験をしながら経済学を身近に感じる良い機会となりました。



## 5 東北水ボラ旅行

2014年 9月26日～28日

2回目となる岩手県立大学・オハイオ州立大学・本庄国際奨学財団合同の水ボラ研究旅行を東日本大震災で被害を受けた岩手県の大槌町・大船渡市・陸前高田市で開催しました。郷土芸能「舞虎」を鑑賞。多くの尊い命が津波に流された大船町が、力強く立ち直ろうとする素直な心と強い意志を感じられました。



## 6 食と健康研究助成金成果報告会

2014年 10月10日

食と健康研究助成金の第1期受賞者による研究成果報告会を、伊藤園本社の会議室で行いました。岐阜大学の長岡利教授、山梨大学の望月和樹准教授、金英一さんの3名が食品と食品成分の健康に対する作用機序に関する研究成果を発表しました。



## 7 スポーツ大会

2014年 10月16日

国立青少年記念オリンピックセンターでバドミントン大会を行いました。ニューヨークから一時帰国中の島田悠一さんも参加して、大いに盛り上がりました。



## 8 OB会 in 上海

2014年 10月18日～19日

上海でOB会を開催しました。1期生から15期生まで15名が、中国各地より集まってくれました。ほとんどが初対面にもかかわらず、まるで兄弟姉妹のように仲良く語り合い乾杯をし、日本留学時代や今の仕事、社会情勢について語り合いました。2日目は日本にゆかりの深い紹興の町を旅行しました。



## 9 京都研修旅行

2014年 10月25日～26日

京町家に泊まる京都での研修旅行をおこないました。高台寺では有名な茶室の見学と茶道体験、町屋の道場では茂山良暢さんによる楽しい狂言ワークショップに参加しました。翌日は建仁寺で座禅体験。住職の貴重な講話がそれぞれの体験に添い、心に糧になったと思います。



## 10 バーベキューパーティー

2014年 11月15日

東京国際交流館でバーベキューパーティーを行いました。4期生のナビン アリヤルさんが来日されたことをきっかけに声をかけ、当日はあいにく雨模様となつたために、東京国際交流館のキッチンスタジオをお借りして、ネパール料理を囲む会となりました。



## 11 第8回 HISFワークショップ

2014年 11月24日

セルリアンタワー東急ホテルで4期生、東野アドリアナさん(明石高等専門学校准教授)による「茶の湯の日本建築～数寄に見る日本の美学」の講演会を開催しました。日本の伝統建築や現在の住まいや住居に関する日本に関して、留学生たちから興味深い質問がたくさん飛び出しました。



## 12 忘年会

2014年 12月26日

品川プリンスホテルで忘年会を行いました。大相撲初場所チケットが当たる恒例の「お国自慢クイズ」。今年は17期生のジョン・エメ・シャルル・アルフレッドさんが担当しセネガルにまつわるクイズを楽しみました。



## 13 歓送迎会および研究助成金授賞式

2015年 3月24日

ハイアットリージェンシー東京で恒例の盛大なパーティーを開催しました。17期生のソフィア・スイダリさんがインドネシア、パリの伝統舞踊をガムランの調べに載せて華麗に踊りました。



## 14 水ボラ

岩手県立大学の千葉啓子教授をリーダーとする「水ボラ」に参画して2年たちました。岩手県陸前高田市の仮設住宅や個人宅を訪問して、東日本大震災で被害を受けた方々との対話を続けています。2014年度は12回の活動にのべ92名が参加しました。



## 15 なつかしい再会

財団を訪れてくれた方、現地で出会った方、ミニ同窓会など…財団のことを忘れずにいてくれてありがとうございます。

